令和6年度　自己評価計画書（最終報告）

石川県立ろう学校

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実施状況の達成度判断基準	判定基準	分析及び今後の課題
1教科指導の充実と専門性の継承	①手話言語等のコミュニケーション手段の適切な活用を通して、日本語による言語活動を促し、聴覚障害のある幼児児童生徒に対する基本的な授業スタイルや関わりを検討し、専門性の向上及び継承につなげる。	○研究研修課	【成果指標】 研修講座や部研究（指導案検討）、寄宿舎行事の立案等を通して、授業等で個々の実態に応じた幼児児童生徒にとってわかりやすい支援を考え、実践し、幼児児童生徒の言語力や思考力を向上させることができた。	個々の幼児児童生徒の実態に応じた手話等の活用により、幼児児童生徒の言語力や思考力を向上させることを意識して指導できた教職員が、 A　80%以上 B　70%以上 C　60%以上 D　60%未満	教職員 中間評価98%　A 最終評価98%　A	【成果】 手話、聴力測定、発音に関する研修等で教員が専門性を確実に身に付けられるよう取り組み、子どもの聞こえやコミュニケーションの様子、学習面での理解の様子を観察して子ども達に接している。また、学校研究において、教科の見方、考え方が身に付くよう授業研究を続け、複数の教員で子どもの実態を正しく見取り、効果的な支援を考えている。 【課題】 子どもの更なる成長に繋がるよう、今後も、教員集団で適切な実態把握の視点をもち、個々の幼児・児童・生徒のニーズに応じた支援を実践したい。そのために、子どもの心理面に関する支援の理解、手話等のコミュニケーションスキルの向上、補聴機器に関する知識のアップデート、聴覚障害に配慮したわかりやすい教科学習指導の実践を、校内研修や校内研究で継続していく。
	②デジタル教科書の活用及びICT機器を活用した文字情報提示による情報保障（UDトーク等）を授業に生かす。	○総務課	【成果指標】 幼児児童生徒の言語力の向上を意図し、ICT機器によるデジタル教科書や文字情報提示による情報保障などについて、授業や行事等で活用することができた。	言語力の向上を意図し、ICT機器を授業や行事等で活用することができたと思う教員が A　80%以上 B　70%以上 C　60%以上 D　60%未満	教職員 中間評価87%　A 最終評価91%　A	【成果】 デジタル教科書やICT機器の使用に慣れてきており、ほとんどの教員が授業で活用している。 【課題】 個々の児童生徒に応じて、必要なツールは何か、どのような使用場面が想定できるかなどを検討し、授業における効果的なICT機器の活用を考えていくことが必要である。
			【成果指標】 授業のときに、自分のICT端末を使って、わからないことを調べたり、考えをまとめたり、友達と意見交換したりして、課題を解決することに粘り強く取り組むことができた。	学習場面でICT端末を使って課題解決に向けて取り組めた児童生徒が、 A　80%以上 B　70%以上 C　60%以上 D　60%未満	児童・生徒 中間評価84%　A 最終評価91%　A	【成果】 1人1台タブレット端末配布から数年が経ち、子ども自身も身近に端末があることで使用に慣れてきている。授業等での使用場面が増え学習ツールとして浸透している。 【課題】 タブレット端末の使用場面や意図などを見直し、個の学びを深めるための活用方法の質の転換と向上を目指すことが必要である。
学校関係者評価委員会の評価		発表等の内容が文字で表示されるのは、聴覚障害の児童生徒にとって重要な支援であり、本校でも日常的にできる状況が望ましい。タブレット端末を全員が持つようになった。他県のろう学校と一緒に交流で使うケースや在宅で授業を受ける際に、文字提示の支援の他に手話も保障されると良い。先生方は、今後も全国規模の研修などに積極的に参加し、広い視野で本校の生徒の指導にいかして欲しい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		タブレットのアプリ設定で英語は英語で、日本語は漢字、漢字にルビ付きなど選択表示できる。その効果や表示する文字数について試しているところである。授業中は授業者が手話をして、文字も表示されるようにする。社会につなげる意味で、電話リレーサービスに登録し、使い方の学習も進めている。外部模試は錦丘高校に行って一緒に受けるなどし、他校の試験の雰囲気を肌で感じる機会を設定している。最近、大学入試が変化しており、単に学力があれば良いのではなく、いかに自分で課題を見つけて探究していくかを問われる。その対応として、錦丘高校の探究の時間に3学期から参加させてもらっている。少人数でも探究的な学びができるように模索していく。				
2共生社会の実現に向けたキャリア教育の推進	③本校の幼児児童生徒と聴覚障害のない幼児児童生徒が、交流及び共同学習の中でキャリア発達を促す。	○部主事、部主任及び交流担当	【成果指標】 交流を深めるために複数回、学校間で交流及び共同学習ができる場を設定し、その活動を通して個々のキャリア発達を促すことができた。	複数回の交流及び共同学習を通して、キャリア発達の視点を持って参加し、ねらいを達成できた児童生徒が A　80%以上 B　70%以上 C　60%以上 D　60%未満	部主任及び交流担当 中間評価100% A 最終評価100% A	【成果】 交流前に目標を確認することで、達成感を感じることができた。聴者とのコミュニケーションの経験で、必要な支援を伝える必要性を実感できた。同じ目標を持って交流することで対話が深まり、生徒にとって将来に繋がる有意義な経験となった。 【課題】 複数回の交流における目標の繋がりを意識できるように、キャリアパスポートの内容や使い方の検討が必要である。相手校との日程調整や予算取り、本校の指導体制や指導スキルの維持継承の面での課題がある。
	④主に聴覚障害のある0～2歳の乳幼児の就園や一般の小中学校や高等学校に在籍する聴覚障害のある児童生徒に進学・就職等に関する情報を適切に提供するためのセンター的機能の充実を図る。	○きこえの相談支援センター、 乳幼児教育相談、 進路指導課	【満足度指標】 主に聴覚障害のある0～2歳の乳幼児や一般の小中学校や高等学校に在籍する聴覚障害のある児童生徒に対してセンター的機能を充実させるために、各学部やきこえの相談センターなどの校内資源を最大限に生かし、就学・進学・就職等に関する情報を適切に提供することができた。	就園・進学・就職等に関する情報提供について、満足したと回答した、一般校に在籍する幼児児童生徒や保護者、教員等が A　80%以上 B　70%以上 C　60%以上 D　60%未満	専門相談担当 中間評価82% A 最終評価100% A	【成果】 担当者全員が就園・進学・就職等に関する情報提供について意識をもって相談業務にあたることができた。様々な年齢層を担当する相談員同士で各ケースについて情報共有を行うことで、長期的な視点に立った情報提供が行えた。 【課題】 適切な進路選択には、保護者や本人の障害理解や自己理解や不可欠である。進路選択に関する情報提供だけでなく、普段の相談から聴覚障害への理解や自己理解につながるような対応を心がけていく必要がある。
学校関係者評価委員会の評価		子供は今後共生社会に出ていかなければならない。錦丘高校との合同授業、小学部もオンラインで他県のろう学校と合同授業を始めたとの話もあった。人数が少ないことがデメリットとするなら、今後も対面やオンラインでの授業交流をぜひ継続してほしい。センター的役割でいうと、ろう学校から先生が行ってその子を教えるのではなく、関わる教員の力をアップするのが大事だと思う。在籍する学校での障害理解を高めていくことがますます大切になってくる。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		ろう学校で学ぶ幼児児童生徒は減っているが地域の学校に在籍する子どもは増えている。センター的機能として、地域で学ぶ子どもが困らないように支援することも大事であり、それがろう学校の役割と考える。ろう学校の専門性を生かした支援や就園・進学・就職等に関する情報提供を丁寧に行っていく。また、ろう学校でしかできない聴覚障害教育をアピールしていくことも必要である。				
3健康で豊かな心が育つ安心・安全な学校づくり	⑤震災での教訓を生かした保護者、地域と連携した防災訓練を実施し、防災への備えを高める。	○保健体育防災課	【満足度指標】 児童生徒や保護者、教員がわかりやすい震災時の体制を整え、それぞれが震災時にどのように対応するのかについて共通理解することができた。	震災時の対応について理解できた児童生徒、保護者、教職員の割合が A　80%以上 B　70%以上 C　60%以上 D　60%未満	児童生徒、保護者、教職員 中間評価99%　A 最終評価99%　A	【成果】 避難訓練の事前事後指導や日々の指導の中で、自分の命を守るための行動を意図的に指導できた。防災講演会、避難所体験は、保護者、子ども、教職員が防災についてともに考える機会となった。保護者からは、引き渡し訓練や個人用備蓄品の準備等を通して、災害時に想定されることを考える機会となったという意見があった。 【課題】 引き渡し訓練や防災講演会に参加できなかった場合、懇談時に確認する機会を設ける、実施後にホームページへの掲載を通して情報提供するなどが考えられる。
	⑥心を育む学校環境整備の充実をはかり、情報モラルを適切に指導したいじめのない学校づくりを目指す。	○指導課、 美術科、 各部	【成果指標】 幼児児童生徒の心を育むために、学校の環境整備を行うことや、情報モラルに関する指導に注力することができた。	幼児児童生徒の心を育むための、学校の環境整備や情報モラル教育を行った教職員の割合が A　80%以上 B　70%以上 C　60%以上 D　60%未満	教職員 中間評価100% A 最終評価100% A	【成果】 個々の子どもの実態を踏まえ、相手の気持ちや周りの状況等を思い描いた言動ができるよう、実際の場面や授業、集会等様々な場面を利用して情報モラル教育、掲示物・展示物・清掃等の機会を通して心を育むための環境整備を先生方が常に意識し実践している。 【課題】 突発的に指導が必要な場面ができたとき、担当の先生任せにせず、相談できる教員間の連携、学部・学校全体で取り組める組織力をつけていくことが大切である。
学校関係者評価委員会の評価		防災に関して育友会の取り組みはとても良い。災害時の安否確認手段として、SNSのアプリが安定していて良いと言われるが、携帯を中学生ぐらいから持っているのか。便利な反面、SNSの活用は心配な面もあるので、情報リテラシーを高めていってほしい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		タブレット端末を持ち帰り、子供はスマホかタブレット端末を用い、グーグルクラスルームでやりとりをしている。育友会とタイアップして「ホッとネット大作戦ネクスト」を行い、子供たちの情報リテラシーを家庭でも学校でも高めていく。				
4働きやすい学校づくり	⑦マニュアルを基に平準化や効率化を目指し、業務を遂行する。	○各課	【成果指標】 見直したスケジュールやマニュアルの改善を継続しながら、円滑に業務を引継ぎ、課内の業務の平準化と効率化を意識して業務を遂行できた。	見直したスケジュールやマニュアルを基に円滑に業務を引き継ぎ、課内の業務の平準化と効率化を意識できたと思う教員が A　80%以上 B　70%以上 C　60%以上 D　60%未満	教職員 中間評価94% A 最終評価100% A	【成果】 年度当初に担当者が替わっても引き継いだ業務をスムーズに把握し見通しが持てるように、後期は、データや紙媒体の整理方法を具体的に提案した。整理方法を工夫することが効率化に繋がるという意識を持つことができた。 【課題】 課の主任に偏りがちだった業務については、委員会などの担当者を分けるなどして、業務の平準化に向けての取り組みを進めていく必要がある。
学校関係者評価委員会の評価		特に意見はなかった。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		課の主任に偏りがちだった業務については、委員会などの担当者を分けるなどして、業務の平準化に向けての取り組みを進め、ワークライフバランスを推進をする。				